

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和元(2019)年  
8月号  
通巻588号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和元年8月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)45-1192  
★印刷 大倭印刷 監修  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



沖縄、ヤンバルの海岸で見た光景 神奈川県横浜市 加藤晴美さん撮影 (文・8頁)

昭和40(1965)年8月11日 東光大祭法話より

## 三千世界で本当に信頼できるものは何か

法主 矢追日聖 (満53歳)

### 光の瑞祥

毎年旧の七月十五日は、東方に光の瑞祥が出た日でございますので東光大祭と申しております。そうしたことについて、去年の『大倭新聞』九月号(復刊二号)にも「和の光、ここにあり」の見出しで書いております。

書いたものだけでは具体的な場所は分かりにくいのですが、いま目の前にある池の堤防の中央の真下の田んぼの畔で、牛の草を刈っている時にそのような奇瑞が出たんです。当時はまだここで牛のケツを叩いて百姓をしながら、時間をさいて宗教の仕事をしておりました。

靈動した経験のある方はよく分かると思いますが、自分は何も意識しておりません。もう日が暮れてきますし牛の草を刈ってやらないかんし、たまたま俯いてがむしゃらに刈っておりました。その時に上から頭を引っ張り上げてくるんです。こつちは仕事のことしか考えておりませんから、上がってくる頭をまた俯く、また上からぐっと引き上げられる、何くそって調子で俯く。そんなことを四、五回繰り返して、とうとう抵抗しきれなくなつてぼつと上を向いた時、自分の頭の真上に、真正面は東の方だったんですが春日山から(西の)生駒山の方まで、サーチライトのように八の字に光が広がっておつたんです。

ちようど日の暮れですから、それは紫がかつたような桃色がかつたような何と

も言えないきれいな色でね。これは自然現象ですよ。当時、私だけではなく他に見た人もあるらしいです。単なる自然現象として片付けるにしても、あまりにも美しすぎるほどだったんですね。

その時に天から声が聞こえてきた。戦争で負けたことがひとつの節にあたっておりますので、戦後の社会に、仏教到来以前の日本の国にあった神ながらの宗教を、今の時代に正しく伝えなければならぬ。この場所を拠点として、世間の人に知らせなければいけない時が来たというようなことを言うんですね。

それをまず自然現象で証明され霊示された訳です。これが終戦から一年後の昭和二十一年八月十二日、旧の七月十五日満月の日のことです。

終戦の年の八月十五日には、大倭神宮において大倭教として立てという霊示がありました。だからぼつぼつ宗教活動の準備をしておりましたが、丸一年目にそのような自然現象としての瑞祥が現れたのは、大倭の宗教で立つ、それがいよいよ出発だという霊界からの裏付けということになり、本質的な立教開宣の記念日になると思います。

## 宗教法人設立の頃

現代社会において実質的な宗教活動をするために、昭和二十一年七月十七日に既に宗教法人設立登記を完了しておりました。別に法人でなくても活動はできますが、人間世界には法律というものがありますので、それに従っておくことも結構なことです。法人登記をいたしました。

法人設立についてもいろいろ難儀なことがありました。書類が整っていないければ登記は受け付けられません。天理教とか仏教のお寺に僧籍があるとかの立場があれば、その宗教団体から新しい宗

教をやるんだと資格証明が出せる。法律はそれを要求しておるんです。ところが私の場合、出家したこともなく、どこかの宗教団体に所属したこともなく、私についての資格証明が主管者から出ない。宗教法人設立の添付書類に資格証明だけが付けられません。そのことで二十一年の初めころから裁判所と揉めておりました。

なかなか受け付けてくれないので夏の暑い時分に毎日裁判所に足を運び、私自身も宗教法人令を研究してみました。どうしても法に矛盾があるんですね。信教の自由が憲法で認められておるのに、資格証明ひとつ足りないために新しい宗教である大倭教が法人になれない。こんな矛盾はないと裁判所といろいろ話し合った結果、私の理屈に係員もみな尻尾を巻いて、最後にはこれは法の矛盾だという結論になりました。

そもそも奇跡とか神祕とか神様を認めていないのなら宗教法人令は根本的には必要ないのであって、国が宗教法人令というものを作っている以上は、奇跡や神祕を法で扱うべきだというのが私の理屈でした。そして宗教をやりたくないのに神様がやれというからやるんだ、俺自身は嫌なんだと、そんな話し合いをするものだから裁判所も面喰いましてね。

で、七月に入ってから資格証明についての妥協案が成り立ちました。つまり、神様が言うから矢追日聖が新しく大倭教を創るということ。信者さん達が証明さえしてくれば、それを資格証明にしようということになったのです。ここにおられる鈴木さんや、布施や柏原の方々にご厄介になつたと思います。

矢追日聖は神様の霊示・神示によって大倭教を創った、我々はそれを信じている、そのことに間違いはないという連判書にずらつと名前を書いて

判子を押してくれました。文部省が認めるかどうかは分からないけれど、一応裁判所では受け付けることになって、昭和二十一年七月十七日に宗教法人の設立が出来ました。

それから全国で資格証明の問題が起こつたらしいです。結局、信教の自由のもと新しい宗教を認める立場で、もう資格証明はなくそうと法を改正いたしました。資格証明があるということとは既成宗教の分派にすぎないということで廃止になったのです。昭和二十四、五年頃から、あつちでもこっちでも宗教法人が出来たのはそれがためなんです。

こうしてちよつと頭を打ったんですが、昭和二十一年七月に法人設立、同年八月十二日が実質的な大倭教としての立教開宣で今日がその記念のお祭りになるんです。

## 人は何かに縋りたい

昨年の夏頃から大倭の機関紙『大倭新聞』が復活しました。若さ溢れた新人が編集をやってくれていますので外観もずいぶん違ってきます。まあ、話というものはある程度気持ちには残りますが、大体その場限りだと思っております。ところが書いたものとなると、分からなければ何回か繰り返して読めます。皆さん方も日にお忙しいでしょうけれども大倭には別に經典はありませんので、この新聞を大倭の經典だと思ってお暇お暇によく読んでもらいたいと思います。

あの新聞は難しすぎて読む気にならんと信者の方々から意見を聞きますが、もの出發ではある程度の気骨、骨のあるものを出しておかんとね。始めから蛸みたいなん出しておつては具合が悪いので、私は大倭の筋金のあるところをちよいちょ

い覗かして書いておきます。

人によれば矢追日聖は下気違いやと思つて読んでいるかもしれませんが。あるいは本当の宗教に徹した人であれば喜んでくれるとか、これはもうその人なりに受け方が違うのですが、分からなければ分かるまで皆さん方も努力をしてほしい。

と同時に、現在はいろいろな宗教がありますので、世間にある宗教と大倭の宗教を比較してみても、大倭のどこがいけない、大倭のどこがいいと皆さん方なりに批判してほしいですね。しかし、あまりに論理的な教学や教理、難しく言えば哲学とかでは本当の信仰はできないんです。信仰は信じる世界ですから、教えの内容がいいとか、一生懸命勉強したからといって信仰の境地には入れるものではないんです。

人間というものは何かに頼りたい。頼らなければ頼りないというところに、人間が生まれながらにして本質的に持っている弱さがあるんです。そういう弱みは皆持っています。

終戦後の世相を見てもそれは言えます。弱みがあるために何かに頼りたい。宗教に頼る人もあれば、拝み屋やマルクス、天皇陛下に頼りたい人もあるやろうしね。いちばん広く頼りたがっているのが人間の知識、科学。科学に頼つたらいちばん安心やと思つている人が世の中の大部分だろうけれど、その科学たるやまだまだ研究の余地がある未熟で頼りない段階なんです。

もし神さん仏さんであろうと、科学や思想であろうと何にも頼らんでいいというのは大した人です。そうなってくれたら宗教も何もいらぬ、世の中は円満に幸せにいく筈です。ところが皆何かに頼るから世の中は複雑にややこしなるねん。

例えば、科学の中でも医学に頼っている人がずいぶんとある。ところがどれだけのインテリであ

つても、医者はこの病気は全然分かりません、どんな治療をしたらいいのか、治るか死ぬかも分かりませんと言われた時に、普段は迷信だと笑っておるような神さんに救いを求めて行く例があるんです。私のところにも随分来ますよ。

県庁の偉いさんでも大学教授でもそういう場面にぶつかつた時に、結局、平素は笑つておつた私のところへでも救いを求めて来た人がかなりあるんです。だから、人間が自分の頼っているものが頼りきれなくなつた時、どれだけ惨めな自分になるかを反省する必要があると思うんです。ぐうたらな宗教がなんぼでも流行るのは、そういうところがあるからです。

そこで宗教というものの本質、本当の宗教というものを皆さん方もよく考えたいと思う。その時におそらく知識の世界では捉えることはできないし、自分の体験によって得たものでなければ難しいと思うんです。

### あなたは何を信頼するのか

今、手元に今年七月号の『大倭新聞』があります。夕べその新聞ができて来てちよつとつまみ読みしました。皆が忘れかけているような大倭の古いものを発掘すればその中に大倭の元の姿、源流を見出すことができるだろうと、編集をやつてくれている若い人達がいろいろ掘り出そうとしているんだと思います。

子供達はよく覚えておるのか私の記憶にないことも書いておきます。何か気持ちに残ることを書いてくれとやかましく言われて書きましたが、私の場合全部が思い出なんです。それも記憶ではなく昔の記録から引き出したものです。他の人は記憶がいいけど、私は忘れまますからみな書いてお

くんです。その中に、今日まで二十年間歩んで来た私の行動を通して大倭の姿があると思うんです。

いつも話しますように自分の意思では何ひとつやつたことはありません、これは皆さんに断言できます。腹の底まで気違ひになってませんか世間並みの常識もあるし、仮に自分の意思でやるのであればこんなことをすれば恥やろう、人が笑うやろうと分かります。分かつてはおるけれどそれ以上に私が信頼するものがあるんです。

それは霊界です。私は霊界というものを絶対的として信じています。こういう信じ方は霊界が分からない現界人には分かりにくいかもしれませんが、私には霊界は信じるも信じないもない。そういう薄っぺらなものじゃない、現実において存在するんだから。これは私だけが言えることですが、自分が生まれてきた以前のこと、死んだら霊界でどんな生活をし仕事をするのか今の私には分かっているんです。

そういうふうな霊界と現界が結び付いておるわけですが、今は人間界におりますから人間としての歩み方がある。散髪もしますし、こんなものを着て皆さん方の前で話もできます。霊界がこうだから霊界の真似をしようとしても、それは鶉の真似をする鴉で溺れて死んでしまふ。人間は人間の世界ですから、そういうことはできない。

では、現在に生きている皆さん方は何を信頼するのか。お金がいちばんか、血を分けた親兄弟か、世間の人達か、あるいは政府や法律または科学か、絶対的として信頼できるものがあるのかどうかと、私はいろいろとよく考えてみます。

霊界のことが分からなければ現界のことでもいい。お日さんが西に沈めばあくる日、東から出てきて地球は回っている。毎日太陽が頭の上に来る。

春夏秋冬が巡ってくる。そういうことは絶対信頼できるんです。人間というのは決まりきったことに案外無関心になるけれど、私はそれをいつでも嬉しく思う。ああ今日も地球がよく回ってくれた、今日もお日さん出てくれた、ああ今日は雨降ってくれた、天気になったと。そうした目に見えた自然界の動きに無性に感謝できるんです。

当たり前と思ったら大間違いなんです。もし太陽が出なかったり、地球が止まったら我々人類はものすごく惨めになることは分かり切っておるのに、そんなことには滅多にならんと思ってるでしょう。だから問題にもせず安心して、そうして頼りない科学、頼りないお金、頼りない法律やとかそんなものに縋りたがる。世間には信頼できる人間もそうやたら居ない。我がの背中に火の粉が飛んできたときに人の為と言う者はいないんですよ。みんな我がだけのこと考える、そんな頼りない人間を信頼できるはずはない。

この三千世界で本当に信頼できるものは何かと言えば、自然の神ながらのこの動きです。これが我々の気持ちにいちばんびびったり来るし、いちばん信頼できる。しかし我々が目を瞑ってでも抱きつけるような大いなる自然の動き、神ながらのひとりの動きを忘れてしまつて、頼りないものばかり掴みに行くから悩み悲しみそんなものが出てくるんです。

そしてそこに宗教の本当の必要性が出てくるのです。我々が信仰するか宗教に入るのは自己が可愛い、幸せになりたい気持ちからであつて、それはいいことなんです。

### 私は信頼を裏切らない

大倭には大倭の教えはこうだと取り上げて言う

べきものはありません、どこの宗教の教えであつても結構なんです。大倭は神ながらの法則、自然の法則なので、何ひとつ事新しく教理や教えはありません。ただ矢追日聖という人間を通して皆さん方が大倭はこうだなどと思つてくれたらそれでいい。えらい自惚れかも知れませんが、仮にここに何百万の信者ができたとしても、皆さんから人間的に尊敬されるような、信頼される自分であることは断言できます。

私自身、霊界というものを絶対的に信じています。私の一切の行動は霊界からの指示によるものだから、もし霊界の動き、神様の道に反する行為をしたらこの世の中では生きておれません。もう早いこと霊界へばーんと鳥流しをくらつていたと思うんです。生きておると言うことは私人間として忠実に神様の道を行つて、踏み違えていないということをご皆さん方に言えます。

私が個人的な感情で皆さん方にとにかく言うことは恐らくないと思います。だから大倭に来られる皆さん方は、この人間世界において矢追日聖個人を絶対的に信頼してもらつても恐らく裏切ることはありません。もし裏切った場合には私自身が不幸になるし私の命はありません。それだけを皆さん方にはつきりと宣言して今日のお祭りの土産といたします。 文責・編集部

令和元年6月16日

### ◆第343回大倭会文化行事報告

#### 高麗美術館と上賀茂神社

あじさい色 岸野 春子

昨年の文化講演会講師の多賀俊介さん(広島平和記念資料館ピースボランティア)が講演の翌朝、高麗美術館に寄つて帰ると言つておられた。で、



今回幹事の湯浅芳郎さんに、どこに行きたい?と尋ねられた時、ふと高麗美術館を提案した。

当日の参加者10名。岡山から先着した湯浅さんと共に鄭喜斗学芸部長が待つていてくれて、早速、展示品の解説が始まった。ちょうど「朝鮮王朝末期の輝き 語り継ぐ朝鮮の美」という企画展で第一級の美術品ばかりらしい。私は目が節穴なのだが熱意あふれる解説ぶりに感銘を受けた。「高麗」が語源となつて、英語でもKoreaが国名となつてるところから高麗美術館であるとのことだった(写真上)。国と国の間がどうであれ、民と民の交わりが平和の礎になることを願つて、日本の朝鮮通信使の行列図(ユネスコ世界の記憶遺産)も展示されていた。

父親である鄭語文さん(1918~1989)は、両親と共に6歳で日本に来た。祖国が南北に分断されたため、どちらに帰つてももう一方の親族が迫害されるので帰国がかなわなかつた。望郷の念から骨董屋で買った品々が家中にあふれたので、その家を美術館にして、統一王朝であつた頃の高麗という国名を冠したと、インタビュービデオで話しておられた。

高麗の名称に対する世代の違いを感じた。そこから、学生時代にこの辺りが通学路だったという林修三さんの先導で加茂川を渡り、山城の

国一の宮・賀茂別雷神社(通称が上賀茂神社)まで歩いた(写真下)。昭和47年4月23日発行『すさのお』第67号によれば、「神山を神奈備として本殿にはご神体が存在しない」という。夏越の祓の茅の輪をくぐり境内を散策して、さらに東に500メートルほどの上賀茂神社摂社である大田神社(ご祭神は天鈿女命)まで案内してもらった。

洛北は走り梅雨という空模様、万緑の山に囲ま

## 特集 頭幽不二あれこれ

### 人それぞれの「味の世界」

#### 法主さんに教えられる

あじさい邑 青山 法義

物心が付いた頃から何か突然に大きな声を出したり、不思議な動きをする人を見ていたのを記憶しています。これが「霊動」だと思えるようになったのは、法主さんが帰幽されて3、4年した頃、突然夜中に起こされ、ベッドの上で鶴が首をのばすような動きをさせられ、抵抗をしたが動きが激しくなるので、体が勝手に動くのに合わせると楽になり、治まるまでなされるがままにしています。この時、頭の中は意識がハッキリしていて、そういえば昔法主さんが「霊動を起こしている時は逆らうとしんどいんや、動かされるままにしていたら楽なんや」と言われていたのを思いだしました。今でも不思議に思うのですが、どうも霊界人に挨拶する行動があつたのかと思っています。

それから数年してSさんが帰幽されたとの一報、ショックを受けた途端に頭痛が起き、どうし

れ豊かに流れる水もきれいで清々しかった。

昼食のお店探しに、ブツブツ言いながらけっこう歩くはめに。82歳だと言われる山本美恵子さんも頑張る。また料理がゆっくり出てくる。水俣の高倉敦子さんは前日に玄徳院を訪ねて来て、文化行事と知って参加されていたが急いで帰途についた。上賀茂神社から京都駅までのバスは長かった! たった230円でドライブしたと思えば面白かったが、湯浅さんの帰宅は夜10時だった由。

ようもなくなくなり、杉本(順一)さんに話をする。「Sさんやな。お通夜に行つて声を掛けてきてあげて、法主さんにつないであげたらいいんと違つか」と言ってもらい、お通夜に行き、大倭に戻つて法主さんの奥津城にご挨拶をさせていただく、頭痛は治まっていました。しかし翌日の告別式に参加して前日と同じように奥津城に挨拶に行つても今度は治まらないので、もう一度相談すると「これは五十日祭が過ぎるまで法主さんの所に通つてあげなあかん」と言ってもらい、逆らうことなく奥の齋庭と奥津城にご挨拶に通いました。気が付けばSさんが帰幽されちょうど一年が経っていました。

その後もしばらくは霊的なことが原因かと思う体験をさせられました。その中で「霊界」が在るのだ、死んだ世界が在るのだと思えるようになりましたが……酒好きの父・日元が帰幽してから、父に「一緒に」と言うのを忘れて飲んでいると、身内に父からの「法義は酒を吞ませてくれよらん」と伝言が入ってきたと聞かされ、自分が先に呑みでしまうことが多いのですが、父に「一緒に呑み

ましよう」と声を掛けるようにしています。

#### 法主様の凄さを初めて知る

三重県名張市 且田 容子

二〇一七年の夏、アメリカのスポケーンに住む娘・綾子の家族が日本の私共の処に来てくれることになり、とても楽しみにしていました。

七月の始めに来る準備をして待つていたところが、六月末に娘が泣きながら「もう日本に行かれへん」と電話がかかってきました。「どうしたの?」と聞くと、下の息子のEthan(イーサン)が凶暴になり家の中を暴れ回り、娘にも暴力をふるつてくる。「怖くて、飛行機の中やそつちで、このようになつたらと思うと……」と聞いた途端、私は「大倭や!」とすぐに奈良に走り出しました。

原因となつている霊界人がいるとのこと。その方の心を鎮めて頂き、「お加持」もすぐアメリカに送りしました。その後、良い子になつたと聞きほつとしました。日本に来る決心をし、無事何事もなくやって来ました。

それから一日目、また発作が起きました。十歳ですが体格が良く、三十五キロ以上あると思います。太い足でドンドンと家の廊下を歩き回つたり、まるでインディアンが踊りの時に足踏みするように階段も昇つたり下りたりし、大声で喚き、障子もビリビリに破きます。主人が抱きしめると、拳骨で胸を叩かれ真赤になっていました。また大倭に電話して、お陰様で静かになり本当にほつと致しました。

次の日、お礼のため大倭へ参りましたところ、アメリカのスポケーンに住んでいた原住民の霊ですと言われました。私に見せるために暴れたのでしよう、これからは私から直接、法主様にお願

して下さいと教えて頂きました。本人と霊界人が一つの体に混在して不安定な人生で暮らすような場合もあるそうです。大倭に来ていなかったらと思うと恐ろしいです。

その後、朝・夜の食事の前にしっかりとお祈りすることを続けております。

大倭七十四年(二〇一八)の杉本さんの年賀状に、「イーサン君のことについてももう少し続きがあります」とありました。正月明けに行かせてもらうと、国が一つ出来るほどの原住民達が、霊界の大倭に来たがっていたと聞いてもうびっくりです。

五歳位で大倭に縁をもらって安全に過ごしてきましたが、七十八歳になって、本当の法主様の偉大さを知り、改めて感謝せずにはおれません。あれからElenaは、とてもやさしくおだやかに成り、成績も上がって学校で表彰される程だと、娘夫婦も喜んで感謝しております。

今年も八月十五日の祖霊祭には、経木に「ホルデン・イーサン有縁 アメリカ原住民之霊位」と書きました。奈母太加天腹 柏手合掌

## 我が家の体験

奈良市 松永 安裕美 (旧姓山崎)

大倭の私の家族が、少し不思議な経験をさせて頂くようになった始まりは覚えていないのですが、一番印象に残っていることをお話しします。

父はなかなか頑固で、認めたくない事は、見えないフリ、感じないフリをするタイプです。あの時も何か違和感を覚えていたようですが、感じないフリをしていました。このような時の父は不機嫌で、いつも以上に無口になり家族の中に嫌な空気が広がります。私たち家族は「何かあるのは

間違いないから、相談しては？」と言ったと思うのですが、父は「何も無い」と言い、頑として拒否していたように思います。

そしてある晩、家中に父の叫び声が聞こえてきました。「わー、顔が狐になつとるつ」と。父は夜遅くに目が覚め、用を足して手を洗う時にふと顔を上げると、鏡に映った自分の顔が狐になっていたのが驚いたそうです。そのまま家の外に飛び出し、外灯の無い真っ暗な道を法主様の「奥津城」へ向かって全速力で走っていききました。そして「奥津城」に到着すると、顔を地面に擦りつけ土下座をして謝っていたそうです。実際に謝っていたのは父ではなく、父にいたずらをしていた「シロ(狐)」だったそうで、法主様に叱られて一目散に「奥津城」まで謝りに行ったそうです。

後に父に聞いた話によりますと、走っている間、真っ暗な中でもしっかりと道が見えたそうです。そのころの「奥津城」への道は整備されておらず、木の根が出ていて凸凹していましたが、地面から出ている木の根がはつきりと見えたそうです。この時以外でも「シロ(狐)」が父に影響を与えている時は、微かな木の実が落ちる音が聞こえ、その木の実がどこに落ちたかまでわかるくらい人間離れた感覚だったそうです。不思議な体験をしたお蔭で父も観念し、教務所でお話を聞いて頂き、一件落着きました。「シロ(狐)」は名前がほしかったそうで、名前をもらってご機嫌だったそうです。今でも我が家の神棚には、父手作りの台座に教母さんに記して頂いた贅沢な命名札が置かれています。

目印が付いて17年程月日は経ち、父は何度となく不思議な体験をしましたが、未だに懲りずに見えないフリ、感じないフリを限界まで続けています。

\*

私は、夫と愛犬「つくね」の二人プラス一匹家族です。結婚当初は私だけが霊界の方から見える目印が付いていたようですが、夫もつくねも私と暮らすようになって、目印が伝染してしまったようです。私は見えてはいけませんが、見えたり、感じたりすることはありません。霊界の方から信号が送られてくる時は、体のどこかが痛みます。何となく違和感がある感じから、起き上がれないくらいの頭痛まで色々です。その時の霊界の方の置かれている立場で痛みの度合いも違います。

主人とつくねは私のところまで霊界の方々をお連れする運び屋さんで、自分で解決できないので、私が謎解きをします。当初、夫も頭痛等の体の不調で信号が送られてきていましたが、夫の体調が悪くても私は痛くも痒くもないので、霊界からの信号だと言うことに気付かない事もよくありました。そうすると霊界の方がしびれを切らせて、とつもない頭痛になったりして夫だけが真っ青な顔で苦しんでいる状態でした。夫は「これは普通の頭痛じゃないから何とかしてくれ」と言いますが、私も自分の事ではないので、のほほんと「どうだろ?もう痛くなくなった?」と言った感じで、他人事作業をしてしまい、なかなか全ての謎解きが終わらないなんて事も度々でした。

そのうち霊界の方も学習されたのか、最近はその癩に障る現象で信号が送られてくるようになりました。その現象は、主人は「ゲップ」で、つくねは「嘔吐」です。夫の普段の自然現象の「ゲップ」は全く気にならないのですが、信号の「ゲップ」はこれでもかと言うくらいイライラするのです。余りに連続で「ゲップ」攻撃を受けた時は、家出をしようかと思つた程です。霊界の方も必死なのだと思いますが、もう少し気持ちよく謎解

きをさせて頂きたいものです。

(2019年7月4日)

## 霊界通信が始まった

奈良市 吉澤 秀子

私の霊界通信は、法主様が亡くなって1年位経った頃から始まったと思います。始めはただただめまいや嘔吐が酷くて、また疲労かなと思つて安静にしましたが一向に楽になりませんでした。それどころかますます酷くなるばかりで、ポンちゃん(杉本)と志津女さんが様子を見に来てくださって、霊界通信だとのことでした。

それから感じた時は自分なりに紐解いて、答え合わせしてもらい今日に至っています。

始めの頃、歴史的人物なんかの場合は紐解くのに大変でした。学校で勉強した日本史なんか全部、学校へ置いてきたので。

最近の私の体感としてはまず体が重くなったり、むしように食べたくなったりします。また頭痛、吐き気、生あくび等があります。これは通信かなと思つた時は座つて、右中指に全神経を集中して、まず感じたことから聞いていきます。合つていたら、涙と鼻水が出て体が案になつていきます。通信の来てるのは分かるんですが、聞いても直ぐ出て来れない通信もあるみたいで、しんどいのが取れないので困ります。

いつまで続くのか解りませんが、私の場合はこんな感じですよ。

## クロちゃんのいっ

広島県大崎上島町 中本 好子

18年位前、知人から「入院したので来て欲しい」

と連絡があった。特に親しくはない私に?と思つたが、知り合うきっかけを作つた別の友人と見舞いに行つた先は精神病院。「お菓子を持って来て」と頼まれていた。着くと、普段の人柄とは全く違つてパクパクと次から次へとあつという間に食べ切つた。今度は私の腕をとり「一緒に歩こう」と言う。病院のホールを一緒に早足で何周も歩いた。特に話もしなかった。

面会を終え外に出ると、一緒に行つた友人が「何だかしんどい」と言う。「2人でグルグル歩いていたのは何だつたの?」と聞かれたが、私にも分からない。帰り道でその友人は「しんどいのがましになつてきたわ」と言うが、その頃、私は体が重くなつていくのを感じはじめていた。帰宅すると疲労感がどつと押し寄せ、まるで小学生の子どもを背負っているようで段々重さが増していく。あまりの重さに布団で休むが、異様に訳が分からずうろたえた。

法主さんの本を枕元に置き、思わず「法主さん!」と何度も声に出して呼んだ。おおよまとに聞くようにと大倭関係の人に教えられて連絡をすると杉本さんが開口一番に、「法主さんは、わかつてる、わかつてると言われた」との事。通じていた嬉しさと驚きが湧きおこつた。聞けば、入院中の友人から何かの縁で、「クロさん(狸霊)」が私について来たのだと。初めてのことで、相当にオロオロとした。どうしたら良いのか全く分からなかった。「これは法主さんが何かをすることではなく、あなたの問題だから」と聞かされた。それでもなお、うろたえる私に、「あなたもおおよまとでしょ!! しつかりなさい!」と強く喝を入れられて、やっといくつかの質問をした。「すると、入院中の友人は元に戻つたのですね」「家には犬がいるけど、犬は大丈夫ですか」等々。

友人は体は軽くなつたようだが悩んでいることや、犬は大丈夫と教えてもらい、私の気持も落ち着きはじめた。「クロさんを認めて、この家で一緒に暮らすと、クロさんも何かこの家を守つてくれるようなことをしてくれるかもしれない」と話してもらつた。

私が気持ちを決めたら、クロさんにもそれが伝わつたようで不思議である。思えば、体を通してこの体験が私に「顕幽」を知らしめる役割をしてくれた。

## こぼれずみ

編集部 岸野 春子

私には霊界のことは分からない。大倭では霊界の話が多いから、ある時にふざけ半分、「早く霊界に行つた方がいいんですか?」と聞くと、法主さんははじめに答えてくれた。「お釈迦さんは、この世での生は、蓮の葉の露が朝日で乾くまでの間というくらい短いものだ」と説明してはる。できるだけ長くこの世で楽しく生きるのがいい」と。案外、それが私の生きる支えになつている。

法主さんが亡くなった後、周りで、今までそんな心配のなかつた人達の霊的な体験の噂が耳に入り、まあちょつと異様な熱っぽさも感じた。私は関係ないと思つていたのに、とばかりがないでもなかつた。ポンちゃんに「どんな躰けしてるのよ!」と言うと、「法主さんが、自分が教育する」と言うてはる」という返事だつた。

それが、いつのまにか静かに日常茶飯事になつたようだ。ふと聞いてみたい気がして、編集会議でこういう企画を提案した。読ませてもらつて、常々大倭の流れに沿つて動いたり、また正に地下水の精神で何かしら大倭のために働いておられる皆さんの根もとが分かつた気がした。

# あじつじ日記

7月13日 午後、交流の家でF IWC定例委員会。むすびの家 コンサート「中川五郎ライブ」開催が決まったそうです！ 10月22日午後、10000円。  
 7月14日 祝会。この日は常連という顔ぶれでした。  
 7月15日 大倭神宮月次祭。  
 7月19日 永仮まゆり・あづみ姉妹、林修三さん、杉本順一さんが「こもれる魂魄の地を訪ねて」の取材を兼ねたかのように、奈良県御所市柏原の藤井家を訪問しました。この藤井家の中に、後に神武天皇となる狭野命が九州の臍、阿蘇の知保郷からヤマトに東遷して来る時にもなった正妻、吾田邑の吾平津媛終焉の地があり二千年を越えるであろう前から連綿と守られてきた奥津城がありました。  
 7月23日 大倭大本宮月次祭。この日発行の7月号『おおやまと』の昭和40年7月23日法話をCDでお聞きしました。  
 月次祭の前に、法主さんの書かれた「相互而敬愛」の銘板を大倭病院正面から拝殿下に移送するため教長さんが地鎮祭の挨拶をされました。  
 午後4時から大倭会館で大倭会役員会。東光大祭前の大掃除、文化講演会、一泊文化行事等について話し合い。新入会員紹介

もありました。会員同士の交流や各地からの積極的な情報の発信をお願いします。大倭会が法主さんの言われる「和」の光の発信の中心になっていきたいものです。  
 7月28日 新潟県糸魚川市の高澤マズさんと孫の大地さんが、東京の石川千鶴子さんと共に来邑され、杉本さんが応接。  
 7月29日 拝殿前に「相互而敬愛」の銘板据付が完了しました。  
 8月4日 午前8時から大倭墓地、9時より紫陽花邑の大掃除が行われ、猛暑にもかかわらず地域貢献という大倭安宿苑の職員さんはじめ大勢の方々の協力で午前中には大半の部分を清めて頂くことが出来ました。  
 8月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。原爆忌 8月6日・9日、鎮魂のため拝殿の大鼓が打ち鳴らされました。  
 大倭安宿苑では  
 7月17日 セクハラ・パワハラ防止研修会が行われました。  
 7月18日 長曽根寮の厨房火出火想定で防災避難訓練。  
 (菅原園)  
 7月20日 数名が音楽療法士による定期的なレッスン。  
 7月21日 2名が平群町の道の駅までドライブに。  
 (須加宮寮)  
 7月23日 奈良パークホテルで青垣園と須加宮寮が施設交流会

第344回大倭会文化行事

～高速道路利用でぐるっと紀伊半島一周バス旅行、神武軍と戦った丹敷戸畔の慰霊を中心として～

日にち 令和元年10月27日(日)～28日(月)

行く先 南紀方面

集合 藤ノ木台1丁目ロータリー 午前8時15分

行程 【1日目】奈良⇒(西名阪等)⇒鬼ヶ城(昼食)⇒花の窟神社・おな神の森⇒泊  
 【2日目】南紀熊野ジオパークセンター(7月オープン)⇒新装の南方熊楠記念館ミュージアム⇒とれとれ市場(昼食)⇒奈良17時頃

宿泊 太地温泉 花いろどりの宿「花遊」

費用 3万4千円

問合せ 林修三 080-2527-0840 / 岸田哲 090-1679-1453

# あんない

で、食事やカラオケ。  
 (長曽根寮)  
 7月20日(日)ギターデュオ演奏のボランティア。  
 7月28日(特養)「喫茶倶楽部あじさい」に16名参加、季節のおやつや歌レクに、今回は阪神タイガースの応援歌、六甲おろしを合唱しました。  
 (茂毛路園)  
 7月19日 ボランティアアさんによるハンドベルの演奏。  
 (八重垣園)  
 7月29日 例年通り梅酒と梅ジュース(大人気です)を提供。  
 9月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。  
 \*月次祭(大倭神宮)  
 9月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。  
 \*月次祭(大倭本宮)  
 9月23日(月・秋分の日) 午後2時より大倭本宮拝殿にて。

表紙絵について  
 神奈川県横浜市 加藤晴美  
 沖繩で暮らしている間、私は沖繩の写真クラブに参加していません。沖繩各地の知られていない場所に出かけ、美しい風景や珍しい植物などを見、撮影するのがとても楽しみでした。  
 この写真はヤンバル(※山原、沖繩本島北部一帯をさす)の海岸に行き、底まで透き通って見える海底と、まっ青な空と白い雲を見ることができました。すると突然、海底から水の柱が盛り上がり海上へ噴き上がってきたのです。  
 ビックリして見ていると、近くにいた漁船が海水を排出するため水管から勢いよく海水を噴き出しているということがわかりました。しばらくすると近くで泳いでいた若者が、この噴水のような水の柱の上に巧みに乗ってバランスをとって踊っているのです。凄いや！と思って夢中でシャッターを押しました。  
 噴水の上で舞う若者。  
 沖繩の人々は自然を信仰し、海を神と思っている人々です。この姿は何か沖繩の生き方の典型のように思えたのです。  
 夫(※彰彦 野本三吉さん)と共に過(こ)した十四年間の沖繩で私は自由になれました。あの美しい風土を基地の島にはしてはならないと思っています。